

こもる場、遊ぶ場、育ち合う場

フリースクールは

越谷らるご理事長 増田良枝さんに聞く

悩み考える時間が奪われている

今回、インタビューしたのは増田良枝さん。「NPO法人越谷らるご」が運営する「りんごの木」も設立から17年目を迎えようとしている。代表である増田さんに、これまでの経緯や、不登校を取り巻く状況の変化をどう見られているのかをうかがった。

——そもそも、越谷らるごを立ち上げたきっかけを教えてください。

もちろん、娘の不登校がきっかけです。私はこんな人生を送るはずじゃなかったんですから(笑)。

娘が学校に行かなくなったのが、1990年で、すぐに学校と話し合いをしました。でも、その話し合いの場で、とっても納得いかないものを感じました。学校の先生からは、ただ一方的に娘の成育歴や幼児期のころなどの話を聞かれました。私には、「娘さんは、どこか問題が

ある子なのでは?」というようにしか聞こえないう。娘が、いま何に悩んでいるのか、どんな問題にぶち当たっているのか、そうしたことはいっさい聞かれませんでした。帰り際に「なんだか、ちがう」「すごく失礼だ」という思いが湧いてきたんです。

その後、遊学舎を知りました。遊学舎は学習塾として、不登校の親や子どもを応援しており、遊学舎を借りて、学校外の子どもたちの居場所「りんごの木」が90年6月にスタートしたばかりでした。そこに私も参加して、お母さんたちに「学校って、おかしい」って話をたくさんしたんです。そして、その感覚、すごくわかるよ」って、共感してくれましたね。初めてです、そんなふうに言ってくれたのは。その経験が私にとって大きいものになりましたし、りんごの木の集まりがとても大事なものになっていきました。りんごの木で話している、不登校が、学校に行くか、行かないか、という単純な問題ではなく、考えてきました。「なんか、この社会っておかしいぞ」という疑問が沸いてきて、問題意識が広がっていったんです。いろいろな事情で、その後

設立メンバーが離れていきましたが、「こういう場は必要だ」という思いもあり、私が引き受けることになりました。その後、大人の会である「越谷らるご」ができました。

——「りんごの木」の16年間で印象的だったことはなんですか?

登校拒否を考える全国ネットワークの人たちは、とても刺激的でしたね。本当にたくさん勉強させていただきました。全国ネットワークがなければ、こんなに継続しようとは思わなかったでしょうね。埼玉の子どもサポートネットの存在も大きかったです。

越谷らるごでの思い出で言えば、いろんな意味で01年のNPO法人化は大きな動きでした。子どもたちの活動が居場所内で活発になってきたこともあって、私たちは、子どもがもっと自由に過ごせて、自己表現ができる場を保障したいと考えていたんです。それには、これまで週に数日だった「りんごの木」の活動日を週5日にするなど、変えていきたいと思います。

そこで、「りんごの木」をフリースペースからフリースクールに変えること、それから運営主体の越谷らるごをNPO法人

(ますだ・よしえ) 子ども二人の不登校から、1990年より学校外の子どもたちの居場所「りんごの木」に関わる。現在NPO法人越谷らるご理事長(法人が運営する「りんごの木」スタッフを兼任)／NPO法人フリースクール全国ネットワーク代表理事／NPO法人越谷NPOセンター理事。

増田良枝さん

